

# 少年たち

МАЛЬЧИКИ

アントン・チェーホフ Anton Chekhov

青空文庫



「ヴオローチャが帰ってきた！」と誰かがおもてで叫んだ。

「ヴオローチャちゃんがおつきになりましたよ！」と、食堂へかけこみながら、ナターリヤが叫んだ。「ああ、よかった！」

かわいいヴオローチャの帰りを、今か今かと待っていたコロリヨーフ家の人びとは、みんなわれがちに窓べへかけよった。車よせのところ、幅の広いそりがとまっている。三頭立ての白い馬からは、こい霧がたちのぼっていた。そりは、からっぽだった。

というのは、早くもヴオローチャが玄関さきにおり立って、赤くかじかんだ指さきで頭巾ずきんをほどきにかかっていたからだ。彼の中が学生用の外套がいとうも、帽子も、オーバーシューズも、こめかみにた

れさがった髪の毛も、すっかり霜をかぶって、頭のとっぺんから足のさきまで、そばで見ている者のほうがぞくぞく寒けがしてきて、思わず、《ぶるるる！》と言いたくなるような、すばらしくけっこうな寒さのにおいをはなっていた。お母さんとおばさんは、さっそくヴォローヂヤにだきついてキツスをした。ナターリヤは、かれの足もとにかがみこんでフェルト靴をぬがせ始め、妹たちは金切り声をあげた。あっちこちの扉がきしみ、ばたんばたん音をたてた。その中を、ヴォローヂヤのお父さんとうが、チョツキすがたで手にはさみを持ったまま玄関へかけてきて、びっくりしたように叫びだした。

「きのうから、みんな待ってたんだよ！ 途中、変わったことは

なかったかい？　ぶじだったんだね？　どれどれ、ひとつ親子の対面をさせてもらおうか！　はてな、わしは父親ではないのかい！」

「わん！　わん！」と、ひどくからだの大きな黒犬のミロールドが、しつぽで壁や家具をたたきつけながら、太い声でほえた。

ものの二分ばかり、あたり一面わあつという喜びの声に包まれた、その喜びのあらしがおさまると、コロリヨーフ家の人びとは、ヴオローヂャのほかにもうひとり、えりまきや頭巾をつけて、やはり、霜をかぶった少年が玄関にいるのに気がついた。彼は、すみのほうの、大きなきつねの外套が投げかけている影の中に、身動きもしないで、じっと立っていたのだ。

「ヴオローチャちゃん、こちらのお坊ちゃんは、どなた？」と、お母さんが小声でたずねた。

「ああ、そうそう」と、ヴオローチャはやつと思いだしたように言った。「これはね、お友だちのチエチエヴィーツイン君、二年生なんです。……うちへお客に来てもらったの。」

「それはそれは、よく来てくださった！」と、お父さんはうれしそうに言った。「すみませんね、こんないいかっこうで……さあ、どうぞ、どうぞ！ ナターリヤ、チエレピーツインさん（名まえをまちがえて呼ぶのはたいへん失礼なことである）の外套をお取りして！ やれやれ、この犬を追っぱらわにや、まったくこまつたやつだ。」

しばらくすると、このそうぞうしい出迎えを受けて、ぼつとなつたヴォローヂャと友だちのチエチエヴィーツインは、寒さのためはまだ赤い顔をしたまま、食卓について、お茶を飲んでいた。雪と窓ガラスの霜の花をとおしてさしこんだ冬の太陽が、サモワールの上でちらちらし、そのすがすがしい光が、フィンガー・ボールの中で水あびしていた。部屋は暖かかった。少年たちは、こおったからだの中で、暖かさと寒さがたがい負けまいと、くすぐりあうのを感じていた。

「もうじき、またクリスマスだね！」と、お父さんは、こい茶色のタバコを紙に巻きながら、うたうように言った。「この夏、お母さんがおまえを見送りに行って泣いたのが、ついきのうのよう

な気がするのに、もうおまえが帰ってきた。……時のたつのは早いもんだ！　またたくまに年をとってしまったよ、チービソフさん（ここでも名まえをまちがえている）どうか遠慮せんで、どんどん、食べてください！　なんにも、おかまいはしませんから。」

十一を頭に三人いるヴオローヂヤの妹たち——カーチャと、ソーニヤと、マーシヤは、食卓に向かっているあいだじゆう、この新しいお友だちから目をはなさなかつた。チエチエヴィーツインは、年まわりといい、背たけといい、ヴオローヂヤとそっくりだったが、ヴオローヂヤのようにまるまるとふとつてもいなければ色白でもなく、やせて、浅黒く、そばかすだらけの顔をしていた。髪の毛はごわごわだし、目は細いし、くちびるはぶあついし、つ



まり、ひどくみにくい少年だった。もし、中学生の短い上着を着ていなかったら、ちよつと見たところ料理女の息子とまちがわれそうなほどだった。むずかしい顔をしていつもだまりこみ、笑顔ひとつ見せない。少女たちは、彼を見るなり、これはきつとたいへん利口な、勉強のよくできる人にちがいない、と想像した。彼は、しよつちゆう何か考えていた。そして、あまり夢中になつて考えこんでいたので、何かきかれると、はつとして頭をふり、もう一度言つてもらいたいとたのむのだった。

そのうえ少女たちは、陽気でおしゃべりのヴオローチャまでが、きようにかぎつて口数が少なく、ほとんど笑顔も見せず、うちへ帰つてきたことを喜んでいないような様子なのに気がついた。お

茶を飲んでいるあいだじゆう、彼が妹たちに話しかけたのは、たった一回きりで、それもなんだが妙なことばを口にしただけだった。彼は、サモワールを指さしながら、

「カリフォルニヤじゃ、お茶のかわりにジンを飲むのさ」と言ったのである。

ヴオローチャも、夢中で何か考えていた。彼がときどき友だちのチエチエヴィーツインと見かわす目つきから察すると、ふたりの少年は同じことを考えていたらしい。

お茶がすむと、みんなはそろって子ども部屋へひきあげた。お父さんと少女たちは机に向かって、少年たちの到着でやりかけになつていた仕事にとりかかった。みんなは、いろいろな色紙でク

リスマス・ツリーを飾る花やふさをつくっていたのだ。これは、ひじょうに楽しい、そうぞうしい仕事だった。新しい花が一つしあがるたびに少女たちは、喜びの叫びを、——そればかりか、まるで、その花が空からふつてもきたかのように、いつせいに驚きの叫びをあげた。お父さんまで、この仕事にすっかり夢中になつて、はさみがよく切れないのでぷりぷりして、ときどき床へ投げつけた。お母さんは、ひどく心配そうな顔をして子ども部屋へかけこみ、こうたずねた。

「あたしのはさみを持って行つたのは誰なの？　イワン・ニコラ―イチ、またあなたは、あたしのはさみを持っていらしたのね？」  
「やれやれ、はさみ一つ貸さないんだからなあ！」——イワン・

ニコラーイチは、泣き声でこう答えると、いすの背にもたれて、ちよつとしよげきつたふりをしたが、すぐにまた仕事に夢中になった。

これまでは、ヴオローヂヤも家へ帰ると、クリスマス・ツリーの用意をしたり、ぎよしゃ 馭者や牛飼いが雪の山をつくるのを見に、庭へ走つて行つたりしたものだつた。ところが、このときは、彼もチエチエヴィーツインも、色とりどりの色紙に見向きもしなければ、一度もうまやには顔をださしないで、窓ぎわに腰をおろすなり、なにかしきりにひそひそ話をし始めた。それから、彼らは地図の本を開いて、どこかの地図をしらべにかかった。

「まず、ペルミへ行くんだ……」と、チエチエヴィーツインが小

声で言った。「そこから、チュメーン。……それから。……トムスク。……それから……それから……カムチャツカ。……そこからは、サモエードがボートでベーリング海峡をわたしてくれらあ。……そうすりや、もうアメリカだ。……アメリカにや、毛皮の取れるけどものがたんといるんだぜ。」

「カリフォルニヤは？」と、ヴォローヂヤがきいた。

「カリフォルニヤは、もつと下のほうさ。……とにかくアメリカへ行きさえすれば、カリフォルニヤだつてもう目と鼻のさきだ。食べものなら、狩りをしたり、かつぱらいをすればいいんだからね。」

チエチエヴィーツインは、一日じゅう少女たちをさけて、ひたい額ご

しにじろりじろりとみんなをながめていたが、夕がたのお茶がすんでから、五分ほど彼ひとりきりで、少女たちの中にとり残されたことがあった。だまつているのもきまりがわるかった。そこで彼は、あらあらしくせきを一つして、右手の手のひらで左手をこすり、氣むずかしそうにカーチャを見ながらたずねた。

「メイン・リードの小説、読んだことがある？」

「いいえ、読んだことありません。……ねえ、チエチエヴィーツインさん、あなた、馬に乗れるの？」

自分ひとりの考えにふけていたチエチエヴィーツインは、この質問には答えないで、ただぷつと頬をふくらませ、暑くて暑くてたまらないでも言うようにため息をついた。彼はもう一度、

カーチャのほうに目をあげて言った。

「野牛のむれが、アメリカの大草原を走ると地面がふるえるもんだから、野生の馬がびっくりして、はねまわったり、いなないたりするんだよ。」

チエチエヴィーツインは、悲しそうにほほえんで、つけくわえた。

「それから、インディアンが汽車をおそう。でも、いちばん手におえないのは、蚊と白ありさ。」

「白ありって、なあに？」

「ありの一種でね、ただ、羽がはえている。ひどくさすんだよ。」

ねえ君、君は僕がだれだか知ってる？」

「チエチエヴィーツインさんでしょう？」

「ちがうんだ。僕はね、モンチゴモ・ヤストレビヌイ・コゴツチさ、降参しない土人のしゅうちよう酋長の。」

末の妹のマーシャは、しばらく彼の顔を見つめていたが、それから、とつぷりと暮れた窓のほうをながめて、考えながら言った。

「うちじや、チエチエヴィーツ（そら豆）は、きのうこしらえたわ。」

チエチエヴィーツインの、何が何やらまるでわからない言葉といい、彼がたえずヴォローチャとひそひそ話をしていることといい、ヴォローチャが遊びもしないで、しよつちゆう、何か考えこんでいることといい、——こうしたことは、みんなひどく謎めい



ていて、奇妙だった。そこで、上のふたりの娘のカーチャとソーニヤは、注意ぶかく少年たちを見守り始めた。夜になって、少年たちが寝に行くと、このふたりの娘は扉にしのびよって、彼らの話をぬすみ聞きした。ああ、少女たちは何を知っただろう？ 少年たちは、どこかアメリカあたりへひと走り行って、金鋤を掘りあてるつもりでいたのだ。途中の用意は、何から何までできていた。ピストルが一ちょう、ナイフが二つ、ビスケツト、火をつくる拡大鏡、コンパス、お金が四ルーブル——これが、持ちものすべてである。少女たちは、また少年たちが数千里もの道のりをとてく歩いて行かなければならないことや、途中、虎や野蛮人とたたかい、それから、<sup>きん</sup>金や象牙を<sup>ぞうげ</sup>手に入れたり、敵をころした

り、海賊のなかまにはいったり、ジンを飲んだりしながら、最後には美しい女の人と結婚をして、農場をこしらえたりしなければならぬことを知った。ヴオローチャとチエエヴィーツインは、話をしながら夢中になって、おたがいにあいての話をさえぎりあつた。そして、そんなとき、チエエヴィーツインは自分を《モンチゴモ・ヤストレビヌイ・コゴツチ》と呼び、ヴオローチャのことを《顔の青い兄弟》と呼んだ。

「あんた、よくつて、ママにお話ししちやだめよ」と、いつしよに寝に行きながら、カーチャがソーニヤに言った。「ヴオローチャは、アメリカから、あたしたちに金や象牙を持って帰ってくるのよ。あんたがママに話したら、ヴオローチャは行けなくなるん

だから。」

クリスマスの前々日。チエチエヴィーツインは、一日じゆうアジアの地図をしらべながら、何かしきりに書きこんでいた。一方ヴオローヂャは、元氣のない、蜂はちにさされたような、むくんだ顔つきで、ゆううつそうに部屋の中を行ったり来たりしているばかりで、何ひとつ食べなかつた。一度など、彼は子ども部屋の聖像の前に立ちどまって十字を切り、こんなことを言いさえした。

「神さま、どうぞ、罪ぶかい僕をおゆるしく下さい！　神さま、僕のかわいそうな、ふしあわせなお母さんをお守りください！」  
夕がたになると、ヴオローヂャは、しくしく泣きつづけた。寝に行くとき、彼は長いことお父さんやお母さんや妹たちをだきし

めた。カーチャとソーニヤは、そのわけを知っていたが、すえつ子のマーシヤは、なんにも——ほんとに、なんにも知らなかつたので、チエチエヴィーツインの顔を見て考えこみ、ため息をつきながら、こんなことを言った。

「ばあやが言ったけど、しようにんき精進期には、えんどうやチエチエヴィーツ（そら豆）を食べなければいけないんですって。」

クリスマスの前日の朝早く、カーチャとソーニヤは、そつと寢床から起きて、少年たちがアメリカへ逃げだすようすをのぞきに行った。ふたりの少女は、とびら口へしのびよつた。

「じゃ、君は行かないんだね？」と、チエチエヴィーツインが、ぷりぷりしながらたずねた。「はつきり言えよ、行かないんだね

？」

「だつてさ、」ヴオローヂヤはしくしく泣いていた。「どうして僕、行けるだろう？ ママがかわいそうなんだもの。」

「顔の青い兄弟、おねがいだから、いっしょに行こうよ！ もともと、君は、だんぜん行くと行って、僕をさそつたんじやないか。それを、いざ出かけるときになつて、今さらしりごみするなんて！」

「僕……僕、しりごみなんかしてないよ。ただ、僕……ママがかわいそうなんだ。」

「行くのか、行かないのか、はつきり言えよ。」

「行くよ。ただ……もう、ちよつと待ってくれよ。僕うちにいた

いんだ。」

「そんなら、僕ひとりで行く！」と、チエチエヴィーツインは言いきった。「君なんかいなくなつて、こまるもんか。今までにだつて、僕は虎狩りや戦争がしたくてたまらなかつたんだ。そんなら、僕のラツパを返してくれ！」

そのとき、ヴォローヂヤがはげしく泣きだしたので、妹たちも、こらえきれなくなつて、しくしく泣き始めた。あたりは、しんと静まりかえつた。

「じゃ、君は行かないんだね？」と、またチエチエヴィーツインがたずねた。

「行く……行くよ。」

「じゃ、支度をしろよ！」

そう言つて、チエチエヴィーツインは、ヴオローヂヤを説きふせるために、アメリカをほめたたえたり、虎のまねをしてほえたり、汽船の話をしたり、ののしつたり、象牙はむろん、ライオンや虎の毛皮もみんなヴオローヂヤにあげると約束したりした。

今や、少女たちには、このやせこけた、浅黒い、髪の毛のごわごわしたそばかすだらけの少年が、ほかの人たちのおよびもつかない、りっぱな人のように思われた。彼こそは、英雄であり、ものおじしない、大胆な人であつた。そして、彼のほえかたは、扉の外で聞いていると、ほんとうに虎かライオンがほえているのかと思われるほどじょうずだつた。

自分の寢室へ帰って着がえをしているとき、カーチャは目につばい涙をためて言った。

「ああ、あたし、とつてもこわいわ！」

二時にお昼を食べるときまでは、なにごともなくすぎたが、食事のあいだに、とつぜん少年たちが家にいないことがわかった。召使いの部屋や、うまやや、はなれの手代のところへ人をやって探したけれど——いなかった。村へも人をやってみたが——見つからなかった。つぎのお茶も、少年たちぬきですました。晩ごはんのテーブルをかこんだときには、お母さんは心配のあまり泣きつづけた。夜になってから、もう一度、村をさがしまわり、角燈をともし川のほうまでくりだしてみた。ほんとうに大変なさわ



ぎだった！

あくる日、巡査がやって来た。食堂で、なにやら書類をつくっていた。お母さんは、泣きどおしだった。

すると、やがて、車よせのところに幅の広いそりがとまった。

三頭立ての白い馬からは、湯気が立ちのぼった。

「ヴオローチャが帰ったぞ！」と、だれかがおもてで叫んだ。

「ヴオローチャちゃんがお帰りになりましたよ！」と、食堂へかけこみながら、ナターリヤが叫んだ。

犬のミロールドまで、太い声で、《ワン！　ワン！》とほえ始めた。

少年たちは、町の宿屋でつかまったのだ。（かれらは、町を歩

きながら、火薬を売っている店をきいてまわっていたのである。) ヲオローヂヤは、玄関へ足をふみ入れるなり、わつと泣いて、お母さんの首つ玉へかじりついた。少女たちは、からだをふるわせて、これからどうなることだろう、とおそるおそる考えながら、お父さんがヲオローヂヤとチエチエヴィーツインを書斎へつれてはいり、長いこと話しているのを聞いていた。お母さんも、何か言つては泣いていた。

「よくも、こんな大それたまねができたもんだ!」と、お父さんは言い聞かせた。「万が一、学校へ知れたら、退学ものだぞ。チエチエヴィーツイン君、恥かしいことですぞ! いかんなあ! あんたが、張本人じゃ。きつと、親御さんからも、お目玉をちよ

うだいするだろう。じつさい、よくもこんなまねができたもんだ！  
どこで、とまったんだね？」

「駅です！」と、チエチエヴィーツインは自慢そうに答えた。

それから、ヴォローヂャは床とこについた。頭には、酔でしめした  
タオルがあてられた。どこかへ電報がうたれてそのあくる日、チ  
エチエヴィーツインの母親だという女の人がやってきて、息子を  
引き取って行った。

チエチエヴィーツインは、たち去るとき、あらあらしい、いば  
りくさった顔をしていた。そして少女たちと別れるときにも、ひ  
とことも口をきかなかつた。ただ、カーチャの手帳を取って、記  
念にこう書いただけである。――

『モンチゴモ・ヤストレビヌイ・コゴツチ』

(М а л ь ч и к и, 1887)

## 青空文庫情報

底本：「カシタンカ・ねむい 他七篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年5月16日第1刷発行

2008（平成20）年6月25日第2刷発行

底本の親本：「チエーホフ全集 第七卷」中央公論社

1960（昭和35）年発行

※底本の二重山括弧は、ルビ記号と重複するため、学術記号の「《》」（非常に小さい、2-67）を「《》」（非常に大きい、2-68）に代えて入力しました。

入力：米田

校正・・noriko saito

2010年7月5日作成

2012年2月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 少年たち

## МАЛЬЧИКИ

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫  
著者 アントン・チェーホフ Anton Chekhov  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>